

HELLO PSJ

Department of Neurobiology, University of Pittsburgh, Pennsylvania, U.S.A. 星 英司

日本生理学雑誌の読者の皆様こんにちは。2002年9月よりピッツバーグ大学のPeter L. Strick博士の研究室に留学し研究生活を送っております。渡米して一年余り、様々な体験をしながら考えたことを書いてみようと思います。

0. はじめに

研究活動をはじめてまもなく、博士の論文を読む機会に恵まれました。ほとんど素人同然だった私ですが、そのインパクトの強さは感じ取ることができました。幅広い視点から脳の機能の本質に挑むその力強さにはひたすら感動いたしました。その後、博士の論文を幾度となく読みましたが、その印象はいつそう強まるばかりでした。どういった思考回路、研究のスタイルからこういった論文が書けるのだろうと無い知恵を絞って考えたものです。従って、留学の機会が巡ってきた時に真っ先に考えたのが博士の研究室でした。そして、博士のもとで研究活動をして一年余り、非常に有意義な時間を過ごして参りました。

1. クリティカル

博士と議論していてもまず感じるのは、非常に批判的であるということです。とくに、身内の研究データにはそれが顕著です。ここにエピソードを紹介いたします。先日、国外から研究者がやってきて、共同研究をいたしました。博士から声をかけて実現した国際プロジェクトです。共同研究者の彼等は大変著名な人達で素晴らしい技術を持っており、わずか三週間足らずで大変立派なデータを出しました。しかし、博士は恐ろしくクリティカルで、自ら“世界で最悪の批判家になる”と宣

言しつつ、あらゆる弱点に容赦ない批判を浴びせていました。当の共同研究者はすっかり驚いたようで、啞然としていました。私も、自分から呼んだのだから、そこまで厳しくしなくても良いのではないかと、思いました。しかし、そこは一流の研究者で、翌日の実験では指摘された問題を全てクリアーして、再び見事なデータを博士に見せたのでした。これを見た博士は、以前の冷徹なまでのクリティカルさを微塵も見せずに、このデータを賞賛するばかりでした。外国からわざわざ呼んだ共同研究者のデータに対する容赦ない批判、良いとなったら心から賛同する柔軟性にはただ感動するばかりでした。今になって冷静に考えてみると、博士の指摘は実を射たものであって、論文の厳しい審査員なら指摘しそうなことでした。結果的に共同研究者は今回の来訪で、博士の研究室に技術をもたらしたばかりではなく、彼等としても大変有用なフィードバック、実験システムの改善を持ち帰ったこととなります。妥協の無い、理知的な批判ができるというのは、結果的に両者にとってプラスになると学びました。

2. “That's an easy task.”

博士の研究室には、プログラマー、電気・機械工作の技術員、二名の解剖学の技術員、二名の動物管理の技術員がいます。彼らは一様に皆優秀で、大変高いレベルの技術を持っています。何故これほどまでに優秀な技術員が多数いるのだろうと、はじめは疑問に思ったものです。この疑問を自分なりに解くにあたって、博士の口癖が参考になりました。それは“*That's an easy task.*”です。博士のなかでは“簡単なこと”は自分の領分ではな

く、難しいこと、チャレンジングなことに集中するのが自分の仕事だと割り切っているようです。従って、その他の簡単なことは技術員に指示してやってもらうということになるのです。驚くのは、その指示がいつもの確で、彼等の仕事をあたかも博士自らが行っているかのような錯覚を覚えさせることです。一つの脳では足りずに、多数の脳が働いているかのようなようです。そのうち、自分の脳では一番の難関だけに集中して過ごせるシステムを構築しているのです。なんと贅沢な時間の使い方ではありませんか。とはいえ、“That’s an easy task.” といいつつ、時には実験の手助けをしてくださることもあります。その手さばきの見事なことと実験技術の深い理解には驚くばかりです。あらゆる技術を自分でマスターしてしまい、本当に簡単に思っているのだと実感させられました。

3. 交流

博士の研究室には頻繁に来訪者が参ります。前述の場合を含め、共同研究者も多数います。彼らの間では未発表のデータ、技術の交換が頻繁に行われています。このようにして実験が企画され実行に移されるわけですから、実験を立ち上げる段階で、十分な準備、検討の時間をかけられます。また、最初のデータがパブリッシュされる頃には、二手、三手先の実験まで進行しており、シリーズの論文を間髪を入れずに発表することが可能となります。用意周到に最先端のテクニックを用いて研究を行えば、おのずからデータの質も高くなるわけです。



Halloween Partyに家族で行ってきました。

4. おわりに

この3ヶ月たらずで、Robert Desimone, Michael Gazzaniga, Eberhard E. Fetz, Thomas D. Albright, Yang Dan といった、錚々たる面々が講演に来ました。聴衆の中には、Peter L. Strick, Andrew B. Schwartz, Carl Olson, Carol Colby, James L. McClelland といった、これまた錚々たるメンバーがいて、活発に議論を交わしています。研究室間、大学間の盛んな交流がアメリカの最先端の研究を支えていることは間違ありません。日本の研究が更なる発展を目指すにあたり、最先端の情報交換が盛んに行われる必要があると思います。

そういった交流の場を将来自ら構築するにあたり、今なすべきことは自分自身で交換できるだけの最先端の情報、技術を身につけることであると自覚して日々精進しております。また、異文化を体験することを通して、人間としても成長したいと思っております。